

今こそ四十年の時を経て

愛媛県立松山東高等学校 1年 藤岡 希

空港に着陸した一機の飛行機。ブルーリボンをつけ、タラップを下りる横田めぐみさん。歴史的瞬間に、日本、そして世界が注目する。もし、めぐみさんが日本に帰ってきたらどうなるのだろう。私たちが何度も写真で見た面影の残るめぐみさんの顔。涙を流す横田夫妻の顔。夫妻が彼女と会うのはあの時以来ということになる。一九七七年、彼女は十三歳という若さで北朝鮮に拉致される。すべてを奪われた悲しみ。生死もわからない娘を想う両親の悲しみ。時が止まったような中で家族が笑い合うことはなかったかもしれない。彼女の誕生日を迎える度に苦しみ、成人式の着物姿も見られず、彼女と同年代の人の子どもを抱く姿を見ては悔しさがあふれたかもしれない。他にも多くの人が拉致された中で、五人が帰国を果たした二〇〇二年、それは私が生まれた年でもある。問題が起きた後で生まれた私は、知識を得るためにアニメ「めぐみ」や舞台劇「めぐみへの誓い―奪還―」を見た。もし自分がと考えるのが怖いほど衝撃を受け、いたたまれない気持ちになった。

残虐な拉致問題はなぜ起きたのか。主な目的は韓国へのスパイの日本人化といわれている。では、罪のない人を巻き込む北朝鮮人は道徳がないのか。ある記事で北朝鮮人は「幼い頃から残酷な人権侵害行為を見ているため、事の善悪が判断できない」と述べている。北朝鮮は、国家第一の「法より拳が強い」社会となっている。道徳の有無ではなく、常識がまるで違うことが、日本人にとって残虐な人権問題を生み出したといえる。

この問題が四十年以上経った今でも解決しないのはなぜだろうか。拉致問題が決着しない限り経済支援はしないという日本。日本が朝鮮半島を支配した過去に怒りを覚え、拉致問題は解決済みと言い張る北朝鮮。拉致問題の解決が先か国交正常化が先か。両国が譲ることなく時が経っている。人権問題として深く考えられる一方で、この問題には政治的背景が絡んでいる。もはや国家間の駆け引きの道具となっているのだ。政治家でさえ何年も解決できないほど複雑化したこの問題を、動かせるものはあるのだろうか。もしあるならばそれは、私たち一人一人の意見、そして世論の形成だと思う。四十年前とは変わり、今はインターネットやSNSで世界と繋がれる時代だ。北朝鮮の情報通信も変化しているらしい。今なら、世界の発信力でこの問題が動き出すかもしれない。大きな世論の力で、人の考えを変えられるかもしれないのだ。そのために私にできることは情報の収集と意見の発信だろう。大きすぎる拉致問題を少しでも知り、仲間と意見を交わし、この作文のようにそれを形にする。そして、二度と繰り返さぬよう後世に伝えていく。解決を願い、この小さな積み重ねを続けていこうと思う。